



A gay dad in the U.S.

Interviewee

Mr. Gerald Mahoney

Q. ご自身のことについて教えてください。

夫の Drew、12歳の双子の息子(Bennett)と娘の (Sutton) とアメリカ・ロサンゼルスに住んでいる。中学の数学教師をしている。

子どもたちが生まれたとき、育児のために数週間休暇を取った。子どもを持つことはとても大変で、やっと子どもを持つことができたのだから、子育てのすべてを体験したかった。仕事に戻ってからは、キャリアを変更して教師になった。この職業を心の底から楽しんでいる。

Q. ご自身のセクシュアリティの自覚と、親になりたいという気持ちはいつ頃生まれましたか？ パートナーと話し合いはスムーズに進みましたか？

自分はゲイであると高校生の時に認識したが、当時はそのことを受け入れることができなかった。大学卒業後の20代半ばになってようやくカミングアウトできるようになった。いつも父親になりたいと思っていたので、ゲイである自分を受け入れるのが難しかった。ゲイであることを認めたら、父親になる機会を失うことになるだろうと思ったから。自分にも

選択肢があると分かったのはうれしい驚きだった。社会が変わるのを見て勇気がわいた。

パートナーと家族計画の話し合いはいつも円満だった。最初のデートの時から二人とも親になりたいと話していた。当時はゲイカップルの結婚は法律で認められていなかったが、親になるという希望は自分たちにとってははずせないものだと分かっていた。問題はなりたいかどうかではなく、いつなるかということだった。

Q. 代理出産のプロセスはどのように進みましたか。その時、何を考え、どのように感じましたか？

夫と私は最初色々な選択肢について考えた。親になるための最も簡単で一番良い方法が何かわからなかった。家族計画を専門としていて、過去にゲイカップルと仕事をしたことがあるカップルセラピストに会うことから始めた。彼女は代理出産について話をし、私たちが考えていた誤解を払拭してくれた。私たちは、養子縁組という手段で家族をつくった友人とも話をした。どちらの選択肢も良い面と悪い面があると知ったうえで、最終的に代理出産を選択した。

最初の段階では、代理出産はワクワクするものだった。これが現実のことなのか、信じられなかった。代理出産を始めた後でさえ、子どもを持つという考えは常に数年先のことだという感じがした。代理母が妊娠した後に、ストレスが生じてきた。



夫と私はアメリカに拠点を置くエージェントを利用することに決めた。彼らは、可能な限りすべてのことを、合法的、倫理的そして安全に行いたいと考えていた。海外へ行くなど、考え得る代理出産の手段は数多くあった。しかしそのエージェントを信じることにした。

私たちは、カリフォルニア南部に住んでいる代理母を希望した。検診に同行できるし、出産までのすべてのプロセスを共に体験できるという理由から。1年ほどかかったが、エージェントは私たちの希望にあった代理母を見つけてくれた。しかし、最終的には彼女に依頼しなかった。タイミングが合わなかったことと、卵子ドナーが見つけれなかったのが理由。最初の代理母を失うという躓きがあったものの、ありがたいことに夫の妹が卵子ドナーになると名乗り出てくれた。そして、この代理出産に関わる全ての人にとってこれが健全なものかを確認するためにセラピーに戻った。夫の妹が卵子ドナーで、私が精子を提供したので、生まれてくる子供は遺伝上私たちの両方とつながっている。

Q. 親としての苦勞、親としての喜びは？ 親としての経験は人生をどのように変えましたか？

すべて喜びしかない。子育ては自分が思い描いていたとおりだ。すべての人にとってそうではないということは理解している。とても労力があることだし、生活も一変する。しかし、私の生活につい

ていえば、すべての面においてよくなったと言える。

労力を要するということは子育てにおける基本だと私は考えている。トイレトレーニング、しつけ、価値観の植え付けなどがそうだ。しかしそういうことに対しても、やりがいを感じた。

家族にはいつも感謝している。良い日もあれば、悪い日もある。時々喧嘩もする。しかし、結局すべて愛すべき楽しい経験だ。

Q. 子育ての仕事の両立は難しいですか？ 子どもが産まれて、パートナーシップに変化はありましたか？

夫と私は、伝統的なヘテロセクシャルのカップルのように子育てを役割分担した。私が子どもたちと家において、夫が仕事に行くというかたち。夫は三人を養うため仕事をしていたにもかかわらず、家事にも協力的だった。その意味で、役割は性別で決めるものではなく、経済的、時間的にみてどちらやるのが良いかということだけだ。

私たちのゲイ仲間で、子どもがいるほとんどの人は仕事に復帰している。ほかの家族も同様にケースバイケースだ。

Q. 子供たちにどのように教えていますか？ 何か質問してきますか？

今朝、ソーシャルメディアのサポートグループの記事を読んだ。「あなたの子どもたちは、『お母さんはどこ？』と尋ね続けるでしょう」というものだ。しか



し私の家族でそれは問題となっていないのでよかった。子どもたちには、最初から正直に話した。小さい時から「代理母」や「卵子ドナー」という言葉を使ってきた。彼女たちの役割を教えるために母の日の代わりに代理母と卵子ドナーの日と名付けた休日をつくったりもした。嘘偽りは全くなかった。一切隠し立てすることはなかったし、子どもたちも彼女たちが誰なのか知っている。

Q. 卵子ドナー、代理母はどのような女性ですか？ どのように付き合っていますか？

代理母とは年に1回くらい会っている。彼女は拡大家族の一員のようなものだ。

卵子ドナーは私の義理の妹だから、関係はより近い。叔母以上、母親未満という感じ。彼女はニューヨークに住んでいるから、年に1、2度しか会えない。卵子を提供してくれたときもニューヨークに住んでいたので、代理出産の間、彼女が常にそばにいたというわけではなかった。これは良いことだったと思う。なぜなら、彼女が疑似母として存在することを避けられたから。彼女は当時28歳だった。最近自身の子どもが産まれた。

Q. 妊娠出産で代理母に生じるかもしれない愛着の問題について、心配がありましたか？

それはあった。私をはじめ代理出産に躊躇したのもそれがあった。しかし、家族計画のセラピストと話したとき、彼女

がその懸念を払拭してくれた。エージェントを通したのもそのため。当事者すべてが心理的に守られるように、また正しい理由で代理出産に関わっているようにするため。エージェントは代理母が自身の子どもを産み終えていて、これ以上子どもを持つつもりがないことを確認してくれた。

エージェントは代理母とどのような関係を持つかは私たち次第だと助言してくれた。私はより親密な関係を持ちたかった。子どもたちに正直でいたかったから。ピッタリの人が見つかって良かったと思っている。

Q. 子どもの出自を知る権利は、ゲイコミュニティやLGBTQのコミュニティのなかでどのくらい啓発されていますか？

ゲイカップルの多くは匿名か半匿名を希望する。私たちは、エージェントには、曖昧なのは嫌だと伝えた。子どもたちの親が誰なのか、混乱しないように、最初からずっと正直でいようとしている。子どもたちは生まれてから一度も「お母さん」を求めたことはない。子どもたちは、自分の家族は特別だと思っていて、それで、自分自身のことも特別だと感じている。

匿名の卵子ドナーを選択したゲイカップルを知っている。自分が知る限りでは、彼らは大きな問題に直面していないようだ。人によっては、それはさほど問題としないこともあるのだとわかった。子どもがもっと大きくなったら、アイデ



ンティティに関する問題が浮上してくるのではないかと懸念している。

義理の妹を卵子ドナーとして選択したのは、秘密をつくりたくなかったという理由もあった。エージェントにオープン・ドナーを選択することができるか尋ねたが、無理だと言われた。卵子ドナーについては限られた情報の開示しか認められていなかった。

Q. 男性が子育てすることに対する差別視はありますか？

「ママ友」の輪に入れてもらえない感じがいつもする。ゲイだからというわけではなく、男だからという理由で。経験していることが明らかに違うから特に傷つかなかったが、社会から取り残されていると感じた。数年前、ニューヨークに住んでいた時に、専業主夫のグループを見つけ、参加していた。3人のメンバーと、週に1回集まっておしゃべりをしたり、子どもたちと一緒に遊ばせたりした。

みんなとても親切で、あからさまな差別に遭っていると感じることはない。それは、米国でも進歩的な地域に住んでいるからということもある。しかし、自分たちのような家族が認められる上で、書類上の問題が残っている。それは「親1/親2」ではなく、「母親/父親」欄がまだにあること。

Q. 子どもの学校生活に関連して何か印象的なエピソードはありますか？

子どもたちが幼稚園に通っていた4歳か5歳の頃、娘が家に帰ってきて私に言った。ヘルパーの誰かが、お母さんがいるはずだと娘に言ったらしい。そして、私たちは、お母さんは絶対に居ないと再び言い聞かせなければならなかった。それは、これまでも何度も繰り返されてきたことだ。

幼稚園の周りの子どもたちは、私たちの家族には二人の父親がいるということを理解している。それを理解せずに、否定してくる子らは、放っておけばいいと教えている。子どもたちはレジリエンスが高く、自分の家族にプライドを持っている。伝統的な家族ではないからといっていじめられたりはしていない。

Q. 学校や地域に Gay Dads はたくさんいますか？ 交流はありますか？

私を知る限りでは、子どもたちの学校や私の勤務する学校にはいない。いるのかもしれないが、まだそこまで自分はほかの親たちとの交流がない。小学校では母親が二人いる家庭はいくつかあった。しかし、今のところ同性親の大きなコミュニティはない。

Q. Gay Dads 向けのグループに入っていますか？

一時期、Men Having Babies のために仕事をしていたことがある。とても有意義なグループだと思う。しかし現在はどこのサポートグループともコンタクトはとっていない。夫と私にはゲイカップルの



友達が何人かいるのだけれども、彼らは子どもたちの面倒を見てくれたりして、とてもありがたく思っている。私の義理の兄弟もゲイで、結婚して二人の子どもがいる。そういえば、義理の妹が彼らの代理母になった。彼らはニューヨークで代理母を見つけるのに苦労していた。

ほかのゲイのカップルとつながりたいとは思いますが、今のところサポートグループを探していない。

Q. Gay friendly を標榜している代理出産エージェンがあります。こうしたエージェンを利用することは、利点がありますか？

私が利用したエージェンはゲイカップルに特化していると宣伝していたが、すべてのクライアントがゲイというわけではなかった。その後、彼らはクライアントの幅をさらに広げていった。

以前はゲイにやさしいエージェンを利用するというアイデアを気に入っていた。もれなく情報が得られるだろうと思ったから。ゲイの結婚は当時違法だったので、親権の心配などがあった。エージェンはこれらについて、ゲイカップル特有の課題だと認識していた。私たちは、代理母の出産に立ち会えるように医者や病院に掛け合ってもらおうようエージェンに頼んだ。エージェンはうまくいくように融通してくれた。とてもよくやってくれたと思う。

最近では、どこのエージェンもゲイのカップルに詳しくなっているようだ。代理出産は進化してきていて、ゲイカップ

ルの結婚は合法だから、法律上の問題は前よりも目立たなくなっている。

私たちの代理出産の費用はトータルで約15万米ドルだった。現在は、それよりももっと高額になっていると思う。費用は自分たちにとっては天文学的な金額で、支払う余裕があるかどうかわからなかったが、養子縁組などほかの選択肢もびっくりするくらい高額だということに気がついた。長期間にわたって貯金をして、一生懸命働いた結果、支払うことができるようになった。

最終的に私たちが支払った合計金額は、エージェンが提示した見積金額に大体合っていた。双子の場合は少し高額になる。IVFサイクルを複数回行ったのでその分、費用もかさんだ。高額だったが、節約のために何かを省くことはしなかった。代理出産は人生における贅品(luxury)だったと考えている。

Q. 新しい生殖技術は、LGBT コミュニティにとって(も)朗報でしょうか？

子宮移植を今すぐに想定するのは難しい。それはサイエンス・フィクションで、倫理面で多くの懸念がある。自分は妊娠を経験したいという欲望はない。もし、同等な機会が存在するなら喜んでやってみようとは思いますが、それができないからと言って、何かをとりこぼしたという感覚はない。

Q. 子育てがしたい、家族をつくりたいと願っているゲイカップルにとって、伝統



的な家族は、どのような意味を持っていますか？

子どもを持つ前に考えたことがある。自分たちは子どもから何かを奪っているのだろうか。例えば母親とか。母親は素晴らしいし、持たなくてもいいと言うつもりはないが、そのほかにも子どもにとって価値のある家族のかたちがあり、伝統的ではない家族のかたちにも大きな価値を見出せるはずだ。

私の子どもたちがなにかを失っているとは思わない。そのような考えのせいで、ゲイカップルが子どもを持つことをあきらめるべきではないと思う。他人からどのように見られようと、ゲイの親は子どもたちが必要とする愛情を全部与えることができる。愛情が一番大事で、愛情があれば、子どもたちは安全で守られていると感じられる。昔からある核家族は、それを与えることができていない。

Q. その他、コメント

代理出産を規制することに賛成。代理出産は契約書を作り、倫理的問題をきちんと考慮して行われるべき。女性の搾取という側面が大いにある。経済的な理由から、女性がやりたくないことを無理にやらせてはならない。私たちの場合は、女性たちの愛情からのものだった。私たちは海外の代理出産を利用したくなかった。女性から搾取するのを避けたかった。非公式のやり方ではなく、正規のエージェントを選んだのはそのため。代理出産に入る前に、厳しい審査を行い、代理母とも腹を割って話し合いを持った。

そのことにとても感謝している。そのような規則抜きでは混乱を招いていただろう。政府は、代理出産を注意深く認可すべきだ。

代理出産と子育ては、私の人生で最高の経験だった。健康で可愛い二人の子どもに恵まれたことに本当に幸せを感じる。

(2021年11月)

Gerald Mahoney [Link](#)

子どもからヤングアダルト向け小説・絵本ライター。小学校などを訪問して、子どもの創造性を育むプレゼンテーションを行っている。

夫の Drew と 2009 年に代理出産で生まれた双子の息子・娘とともにロサンゼルスで暮らしている。

著書:



Jerry Mahoney 2014 *Mommy Man: How I Went from Mild-Mannered Geek to Gay Superdad*. Lanham: Taylor Trade Publishing.